歴史と伝統を活かす
21世紀のまちづくり
まちづくりシンポジウム開催

2月9日、教育会館において、まちづくりシンポジウム「さぎっちょin勝山　歴史と伝統文化が息づくまちづくり」を開催しました。

市民や関係者など、約200人が参加して、まちなかに残されている勝山市旧機業場などの織維産業遺産や、「年の市」や「左義長まつり」などの伝統行事を活かしたまちづくりについて考えました。

左義長ばやし保存会による華やかな舞台で幕が開けると、宗田好史准教授が、「歴史と伝統を活かしたまちづくり―21世紀の勝山を拓く知恵―」と題して、基調講演を行いました。その後のパネルディスカッションでは「歴史の息づくまち『かつやま』のこれから」をテーマとして、パネラー5人が意見を交わしました。

パネラー
勝山市長　山岸　正裕

パネラー
左義長ばやし保存会
桝　家　淳一郎氏
勝山市出身。左義長ばやし保存会会員として、子どもたちに左義長太鼓やその伝統を教えている。

パネラー
㈱まちづくり研究所勤務
竹　原　育　美氏
勝山市出身。福井大学大学院工学研究科建築設計工学科修了。「こどもとまちづくり」について研究。

基調講演

伝統が未来を創る

未来を創るのは「進歩」ではなく「安定」です。未来の子どもたちも、今と同じように左義長を演奏している姿こそが、「安定」です。伝統を守り続けることで、勝山にある良いものを残し、良くないものは修正していくという賢い大人のまちづくりが、歴史と伝統を活かすということなのです。

懐かしさが魅力

現在の観光客は中高年が多く、古さが生き、懐かしさを誘うようなまちが大切になってきます。ですから、古い物を上手に活かし、大切に使うことが大事なのです。

また、最近の傾向として、観光客は自然や歴史に目が向いていて、滞在型の観光も出てきています。勝山は滞在型が一番良いのかもしれません。自然が豊かで、食べ物もおいしく、人情も厚く、これが本当の日本の暮らしだと感じさせるものがある事が、勝山の魅力であると思います。

文化は人に宿る

昔の人の話や思いを聞いてください。文化は物ではなく人に宿るのです。物には文化はありません。その周りにいる人たちが、どう感じるかということです。子どもたちに伝えていくことが重要なのです。

勝山にはそれだけの文化や歴史もあります。そんな中で皆さんの暮らしを豊かにする事と観光を結びつけることは、まちづくりとしてはとても良いです。美しい勝山をつくり、歴史と文化を活かすという大きな流れが、勝山市のまちづくりの中にあるのです。

パネルディスカッション

外から見た勝山

桝家　市外や県外で公演をすると、左義長ばやしは市内では当たり前のことですが、市外のかたから見ると、大変面白いと驚かれます。

竹原　東京から帰ってくると、貴重だと思わなかった自然や左義長などが、凄く貴重なんだと感じますね。

宗田　勝山文化とは、暮らしている勝山の人たちの心の中に共通しておこるものです。ですから、皆さんが左義長や旧機業場に感じる思いと、市外のかたが感じる思いは違います。その違いを認識し、勝山文化、勝山人とは何かということを把握して、勝山っ子を育てていくことが、地域の文化を伝えていくということなのです。

勝山人、勝山文化とは

竹原　子どもが中学生になっても、大人と一緒に一つの物をつくり上げられる環境が大事だと思いますね。

笠松　市外のかたから見て、勝山人は少しずる賢いというイメージがあるようです。明治の終わり頃から、田畑を売って織物業に転向した農家が多かったことからなのかもしれません。

宗田　歴史伝統文化を活かした、新しい流れのまちづくりを勝山が行うことは、とても勝山らしく、相手の裏をつくようなずる賢さであり、この精神を大事にしてほしいです。

伝統文化を活かす

笠松　今まで文化財は、古い物は大事だからと残してきましたが、古い物の心をどう解釈し、活用し、利用していくのかという観点を大事にしていけたらと思います。

市長　日本の近代化を支えた織維の、一番古い建物を残さなければならないという思いから、勝山市旧機業場を皆さんの意見をお聞きしながら、保存・整備を進めています。

桝家　保存会では、太鼓の技術だけではなく、左義長らしさや精神を伝えていく事が重要であると思っています。勝山らしいまちづくりとは、左義長が似合うまちづくりではないかとも思います。

宗田　伝統文化を活かすということは、知識、技術、態度を教える事です。最初に技術をしっかりと教え、その次に態度を教える。知識だけでは伝統文化は通じないのです。

勝山を元気に

市長　今のまちなか整備のコンセプトは、「住んでいる人に愛されるまちは、観光客にもくつろいでもらえ、まちの人との交流もできる。」です。そのようなまちづくりを目指して、市内に訪れる年間約100万人の観光客の、せめて1割はまちなかに呼び込みたいと考えています。そのために、旧機業場に勝山の情報発信機能およびミュージアム機能を持たせて、市民も来訪者も一緒になって楽しめる施設にしたいと思っています。

宗田　地域の個性は人に宿るものですから、これが勝山だということを孫に伝えることをしなければなりません。子どもが人の繋がりを通じて、家庭や地域の中で地域の文化を知ることができることが大切です。

井ノ口　勝山は良いまちなんだという事を、もっと自信を持って子どもと一緒に自慢すればいいと思います。そうすれば、もっと笑顔になり、勝山はもっともっと良くなるのではないかと思います。

問　市街地活性化推進室（☎88-8108）

コーディネーター
福井新聞社大野支社長
井ノ口　節　生氏
上中町（現若狭町）出身。

パネラー
京都府立大学准教授
宗　田　好　史氏
イタリア・ピサ大学、ローマ大学大学院にて歴史的都市保存計画、景観計画などを研究。

パネラー
県立歴史博物館主任学芸員
笠　松　雅　弘氏
勝山市出身。旧機業場活用検討委員会アドバイザー、勝山市文化財保護委員などを歴任。